

メディア・リテラシー活動を担う アクティブ・オーディエンス —GMMPからメディア・リテラシー活動への展開を事例として—

登丸 あすか*

従来のメディア研究では、メディアによって再構成され提示される表現 (representation) に関する研究が中心であった。しかし、近年、メディアから情報を受け取り、解釈するオーディエンスの存在が重要視され、さらにオーディエンスの能動性を引き出すメディア・リテラシー活動とは何かを明らかにすることが課題となっている。そこで本稿では、世界のニュースメディアをモニター調査するグローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト (GMMP) からメディア・リテラシー活動へと展開した実践例を分析し、オーディエンスの能動性を引き出すメディア・リテラシー活動の条件とはどのようなものかを探った。具体的にはまず、日本から参加した11のモニターグループに注目し、GMMPを実施するまでのプロセスを分析した。分析の結果から、積極的な参加と主体的な学びを生み出すようなネットワークの構築が各グループの活動を活性化させるために必要であることが明らかになった。つぎに、モニターグループによる継続的なメディア・リテラシー活動を支える要因を明らかにするために、モニターグループの一つである秋田・市民のメディア研究会を取り上げ、この研究会の会員の参加の仕方や動機に注目した。その結果、多様な視点による対話の実践がオーディエンスの能動性を引き出す重要な条件となっていることが明らかになった。

キーワード：メディア・リテラシー、アクティブ・オーディエンス、エンパワーメント、ジェンダー、グローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト (GMMP)、ネットワーキング

I. はじめに

新聞やラジオ、映画、テレビ、電話など、多様なメディアが急速に発達し、その影響力を増すなかで、メディア研究はさまざまな側面から活発に展開されてきた。具体的には、メディアによって再構成され提示される表現 (representation) に関する研究、メディアの生

産、制作など産業システムに関わる研究、法律や倫理規準などメディアの制度に関する研究、テレビの視聴者や新聞の読者といったオーディエンスに関する研究など、実に多岐にわたる。なかでも、ラジオや新聞、テレビなどを対象とするメディアの内容分析をもとに、メディアのリプレゼンテーションを明らかにする研究には豊富な蓄積があり、メディア研究のなかでも中心的課題であった。しかし近年は、そうしたメディアからの情報を受け取り、解釈するオーディエンスの存在も重要視されている。メディ

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

ア・リテラシー研究では、その基本概念の一つに「オーディエンスがメディアを解釈し、意味を作り出す」（鈴木，2001：103）とあるように、オーディエンスを、メディアからの情報を一方的に受容する「受け手」としてではなく、より能動的にメディアを読み解くアクティブな存在として捉えることを重視している。これまでのオーディエンスを対象とする研究では、その能動性をどの程度認めるかについては議論があるものの、オーディエンスがメディアを利用したり解釈したりするとき、個人によって異なる社会的背景や経験などをさまざまにもち込みながら、能動的にメディアと関わるのがすでに明らかにされている（Ang, 1985, Radway, 1987, Buckingham, 1993 など）。これらの研究の背景には、オーディエンスを画一的に「受け手」という形で一括りにするのではなく、異なる文化やジェンダー、年齢、経験をもつ多様な存在とする見方がある。本稿では、この見方に従い、オーディエンスを多様で能動的な存在、つまりアクティブ・オーディエンスと捉えて、アクティブ・オーディエンスの能動性を引き出すメディア・リテラシー活動の条件を明らかにする研究を行なう。

1. アクティブ・オーディエンスとは

オーディエンスの能動性を示すような研究や取り組みは、新聞、雑誌、テレビなどのメディア利用や解釈に関するもの、人権に配慮したメディア制度の確立を目指したもの、主流メディアからは得られない情報を提供するオルタナティブなメディア活動など、多様に展開している。

鈴木によればメディア・リテラシーとは以下のように定義される。「市民がメディアを社会

的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという」（鈴木，1997：8）。この定義に照らせば、上述のような活動はすべてメディア・リテラシー活動であると捉えることもできる。しかし、ここで留意しておきたい点は、メディア・リテラシーでは、その活動の主体を市民であるオーディエンスと明確に位置づけていることである。

近年、日本でもメディア・リテラシーへの関心がますます高まり、総務省や女性行政などの行政セクターや放送事業者による取り組み、中学、高校などの教育機関における授業や市民活動などで、さまざまな実践が行なわれている。メディア・リテラシー研究が、理論と実践の両面において多彩な展開をみせるなかで、鈴木は、メディア・リテラシーにかかわるオーディエンス研究の課題を次のように整理している。

オーディエンスの能動性とは何かが問われている。ホールによるモデルが仮定した優先的、交渉的、対抗的という三つの読みの違いを生み出す要因は何か。それらの要因と読み手のメディア・リテラシーはどう関連しているか。オーディエンスの側にいる人々が、メディアの単なる消費者ではなく、今日のメディア社会を主体的に生きる市民として、アクティブ（能動的）にメディアにかかわることができるようになるには、どのようなメディア・リテラシー活動が必要か。そして、そのようなアクティブ・オーディエンスにできること、求められていることは何か（鈴木，2005c：289-290）。

ここで示されている能動性は、二つに大別される。一つは、主にオーディアンスによるメディア・テキストの読みに関する能動性であり、もう一つは、メディア・リテラシー活動のあり方や、アクティブ・オーディアンスの役割など、いわば社会的な行動に関する能動性である。

前者については、三つの読みの違いを生み出す要因や、それらとメディア・リテラシーとの関連を明確に示すまでには至っていないものの、ジェンダーや民族的マイノリティなどの視点によるオーディアンスの読みに焦点をあてた実証的な研究が散見される（鈴木、2005a, 阿部、2001など）。一方、後者の課題については、新聞における性差別語のガイドラインを示すような研究および実践活動（上野他、1991, 1993, 1996）や、ジェンダーの視点からテレビCMを分析する市民活動¹⁾などが展開されているが、注目されているのはオーディアンスの活動によってもたらされた結果であり、活動のプロセスやそこに参加するアクティブ・オーディアンス像を明らかにするような研究はほとんど行なわれていない。このような流れをふり返ると、現在の課題は、メディア・リテラシー活動に参加するオーディアンスの能動性とは何か、またそのような能動性を引き出すようなメディア・リテラシー活動とはどのようなものであるかを明らかにする研究であると言える。

そこで本稿では、グローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト（Global Media Monitoring Project, 以下GMMPとする）からメディア・リテラシーへと展開する一連の活動を取り上げ²⁾、オーディアンスの能動性を引き出すようなメディア・リテラシー活動とは何かを追究し、メディア・リテラシー活動のなかで

オーディアンスが能動性を発揮するための条件を提示したい。

2. なぜGMMPとメディア・リテラシーか

GMMPは、1995年以降、5年ごとに行なわれているプロジェクトであり、NGOやNPOに参加している女性たち、研究者、メディアの専門家、学生などの多様な人びとがボランティアで参加し、ジェンダーの視点からメディアをモニター調査するものである。GMMPでは、実施にあたって、年中行事などのイベントが予定されていないごく普通の1日を「世界モニター日」に設定し、世界各地のモニターグループが一斉に、テレビ、新聞、ラジオという3つの主流メディアのニュース報道をジェンダーの視点から分析する³⁾。

GMMPは、1994年の国際会議「女性のエンパワーメントとコミュニケーション」（バンコク）に参加していた女性たちによって始められたものであり、この取り組みが継続的に実施されていること自体、アクティブ・オーディアンスの能動性が強く発揮されていると言える。

1回目のGMMPの取り組みが報告された第4回国連世界女性会議（北京、1995年）では、男女平等を実現するうえで女性のエンパワーメントが重要なキーワードとされた。村松によれば、女性のエンパワーメントとは、「草の根の女たちが“力をつけて”連帯して行動することによって、自分たちで自分たちの状態・地位を変えていこうとする、きわめて行動的で自立的な考え方である」（村松、1995：12）という。またGMMPも、単にメディア内容における女性像・男性像を明らかにすることが目的ではなく、参加する人びとのエンパワーメントを重視している。たとえば、GMMPの運営に深く関

わってきた Hermano は、GMMP から学べることとして、グローバルなネットワークの構築や多くの市民がモニター調査の方法を習得することなどを挙げつつ、GMMP の最大の挑戦とは、「見えないもの」を見ることだと指摘する (Hermano, 2004)。文中では明言していないものの、ここでいう「見えないもの」とは、GMMP のモニター調査を通して明らかになる各国のメディア状況や、メディアと市民との関係を指していると考えられる。これら女性のエンパワーメントに関する主張や GMMP の位置づけを考慮に入ると、GMMP によるエンパワーメントとは、ジェンダーの視点からメディアの現状と課題を明らかにし、自ら変革していくとすることを獲得することであると言える。

ただし、GMMP 実施後、メディア変革に向けてどのような活動を展開するかは、GMMP によって規定されておらず、それぞれの国に委ねられている。その展開の仕方は、各国の政治、経済、社会的状況によって左右されるだろうが、参加者であるオーディアンスの能動性とも大いに関連していると考えられる。Gallagher によると、他国のモニターグループは、GMMP の経験を活かして、メディア制作者や専門家とのネットワーク構築、GMMP の分析手法を組み込んだメディアの研修制度などを実現している (Gallagher, 2001)。放送局や新聞社など、メディア組織やメディア政策に影響を与えるためのアドボカシー活動やロビー活動を実施する国が多いなかで⁴⁾、日本はオーディアンスである市民に焦点をあて GMMP からメディア・リテラシー活動へと展開してきた。このような日本の取り組みは、GMMP のもつ限界とも関係していると考えられる。

GMMP は参加者のエンパワーメントを重視

したプロジェクトでありながら、実際に行なう調査は1日限りの数量調査でしかない。しかし、人びとのエンパワーメントという観点からみた場合、メディア・リテラシーの基本概念や研究モデルに沿った体系的なメディア分析やグループ活動による対話など、メディア・リテラシーの学びのプロセスこそ重要なものであり (鈴木, 2004)、GMMP の実施だけではエンパワーメントを行なうためには不十分と言える。GMMP のモニター調査からメディア・リテラシー活動へとという日本独自の展開は、参加する市民のエンパワーメントを目指し、オーディアンスの能動性をより積極的に引き出すために設定されたものであると言える。また世界的にも、GMMP に一つの国から複数のモニターグループが参加することはほとんどなく⁵⁾、それ自体非常に興味深い現象である。そこで本研究では、オーディアンスの能動性を引き出す活動の条件とはどのようなものかを明らかにするために、①モニターグループによる GMMP 実施までの過程と、②そこに参加したオーディアンスによるメディア・リテラシーの学び、という2つの段階に分けて分析を行なう。

II. 調査の手続き

1. 分析対象

GMMP は2005年2月16日に実施された。日本では、NPO 法人 FCT メディア・リテラシー研究所 (以下 FCT とする)⁶⁾ の代表であった鈴木みどりがコーディネーターを務め、サポートデスクを横浜と京都の2ヶ所に置き、秋田、神奈川/東京、静岡、京都、大阪、岡山、大分の各地から計11グループ、130余名の人たちが参加した⁷⁾。

それぞれのモニターグループは、世界モニター日から1ヶ月の間にモニター調査を行なう。その後、11のモニターグループのうち、秋田、神奈川／東京、京都、大阪、岡山から参加した計6グループが、モニター日のテレビニュース番組を対象にコーディネーターやサポートデスクと協同でメディア・リテラシーワークショップを実施した。メディア・リテラシーワークショップとは、基本概念やメディア・リテラシーの研究モデルに沿って、メディア・リテラシーを体系的に学ぶ場である。具体的には、参加者が各自でテレビニュース番組を映像と音声に分けて文字化し、その結果をもとに、小グループによる討論と対話によってメディアを深く読み解いていくという一連の作業を行なう。

本研究では、GMMPからメディア・リテラシー活動へと続く流れのなかでのアクティブ・オーディアンズに焦点をあてるため、FCTが中心的な役割を担い実施したGMMPと、それぞれのグループによるメディア・リテラシー活動の実践という一連の過程を分析対象とする。

2. 調査の方法

まず、GMMPからメディア・リテラシーワ

ークショップ実施までにみるモニターグループの取り組みを分析する。筆者は、GMMPのサポートデスクとして、日本の事務局の役割を担いつつ、各モニターグループの概要や動きを把握するために、責任者に対して質問紙を送り、回答を得た。また、必要に応じて電話でのインタビュー調査を実施した⁸⁾。モニターグループによるGMMP実施までの過程については、これらの質問紙の回答、電話によるインタビュー調査をもとに分析を行なう。

次に、一連の活動に参加したオーディアンズによるメディア・リテラシーの学びに注目するために、11のモニターグループのうち、秋田・市民のメディア研究会（以下メディア研とする⁹⁾）を取り上げて詳細に分析する。メディア研は、GMMPを起点に秋田市で立ち上げられたグループで、2006年12月現在でも、毎月例会を開催するなど定期的に活動を続けており、GMMPからメディア・リテラシー活動へとという取り組みのなかでオーディアンズの能動性を追究するという本稿の研究課題に沿った研究対象であると考えられる。

筆者は、計3回秋田へ赴き、メディア研のメディア・リテラシー活動に参加しながら、会員

表1 秋田・市民のメディア研究会によるGMMPとメディア・リテラシー活動の実施状況および筆者が行なった調査方法

調査期間	実施したプロジェクト、調査方法
2005年	3月1日 GMMPのモニター調査実施を目的とした例会：筆者はファシリテーターとして参加
	7月1日 メディア・リテラシーワークショップ：筆者はファシリテーターとして参加
	7月2日 メディア・リテラシーをテーマとする鈴木みどりの講演会（秋田市教育委員会女性学習センターとの共催）：筆者も出席
2006年	11月19日 メディア研代表へのインタビュー調査を実施
	11月20日 メディア・リテラシーワークショップ：筆者はファシリテーターとして参加。会員へのアンケート調査、インタビュー調査を実施
	11月21日 会員へのインタビュー調査を実施

へのインタビュー調査、アンケート調査、参与観察を行ってきた。ここではこれらの調査をもとに、メディア研のメディア・リテラシー活動とその参加者の能動性について探る¹⁰⁾。

調査対象と調査期間、GMMPと関わってメディア研が実施したメディア・リテラシー活動、そして、その取り組みのなかで筆者が行なった調査の概要は、表1のとおりである。

Ⅲ. モニターグループによる GMMP 実施までの過程

本節では、GMMPからメディア・リテラシーへと展開する一連の活動に、なぜ数多くのモニターグループが参加できたのかを問うために、言い換えれば、モニターグループが広く能動性を発揮してGMMPに参加できた条件を明らかにするために、その経緯と仕組みを分析する。

表2は、FCTとモニターグループの活動の流れを示したものである。なお、表2にあるFCT-Japan事務局とは、日本のコーディネーターとサポートデスクのことを指す。

はじめに、表2をもとに、モニターグループのなかでも中心的役割を果たしてきたFCTの役割に着目する。

1. FCTの役割

(1)国際的ネットワーク

日本各地から11のモニターグループ、計130余名もの多数のメンバーがGMMPに参加した背景には、日本のコーディネーターおよびFCTの果たした役割が大きいと考えられる。FCTの代表であった鈴木は、1994年の国際会議「女性のエンパワーメントとコミュニケーション」

に出席し、「女性とメディア」のセッションでGMMPが提案される場に参加していた。また、GMMPの運営に責任をもつのは、国際的なネットワークをもつNGO、World Association for Christian Communication（以下WACCとする）であり、FCTはその法人メンバーでもあった。このような経緯から、GMMP実施に際して鈴木が日本のコーディネーターを務め、FCTが事務局の仕事を担当してきたのである。さらに表2にあるとおり、2003年5月にケープタウンで開催された「Global Media Monitoring Project 2005 Consultation Meeting」に鈴木がアジア地域の代表として出席し、調査方法の検討に加わっている。2004年4月には、WACCからGMMPのモニター調査の方法を試験的に実施するためのプリテストの依頼があり、FCTと立命館大学鈴木研究室が協力している。2004年7月には、「Asian Pacific NGO Forum」でのGMMPのセッションにおいて、インドやネパールなどのモニターグループとともにFCTも参加し、アジア諸国からより多くの国がGMMPに参加するよう、呼びかけを行なっている。2005年7月には、台北で行なわれたInternational Association for Media and Communication Research (IAMCR)の年次大会でGMMPのセッションが開かれ、イスラエルのモニターグループの責任者とともにFCTも日本の結果を発表している。

このような国際的なNGOを中心として企画、運営されるGMMPへの参加は、国際的なネットワークへのアクセスの有無と密接に関わっている。ここでいうネットワークとは、一方的に情報を受け取り、準備されたプロジェクトにただ参加するというようなものではなく、調査方法の検討やプリテスト、他国への参加の呼

表2 GMMPの準備からメディア・リテラシー活動の流れ

年・月	活 動 の 内 容	
	GMMP-Japan 事務局	モニターグループ
2003年 5月	・「Global Media Monitoring Project 2005 Consultation Meeting」(ケープタウン)に日本のコーディネーターが参加。世界各地のNGO関係者と研究者が集いGMMPの分析方法を検討。	
2004年 4月	・プリテスト実施 (FCTと立命館大学が参加)	・FCTと立命館鈴木研究室がGMMPのプリテストに参加。
6月	・アジア・太平洋地域フォーラム「世界がメディアを見つめる日：アクティブ・オーディエンスとメディア・リテラシー」でHermanoが世界各地のGMMPの取り組みを報告。	・メディア・リテラシーに関心をもつFCT会員が日本各地から招待されフォーラムに参加。
7月	・「Asia Pacific NGO Forum」(バンコク)にFCTが参加。アジア諸国にGMMP参加を呼びかける。	
10月	・ロンドン事務局が送付したGMMPモニター調査のガイドやシートなどの邦訳作業を開始。	
12月	・FCTフォーラム開催：GMMPの運営・分析方法を説明。	・参加予定のグループの責任者がFCTフォーラムに参加(12月)。各グループはモニター調査の準備を開始。
2005年 2月	・2月16日：モニター日 ・18日にFCT事務局、20日に立命館でモニター調査を実施。他のグループのメンバーも参加して調査方法を学ぶ。	・モニター日に各グループでモニター調査を開始。モニター日のニュース番組を用いたメディア・リテラシーワークショップ(京都・立命：2月22日、岡山：26日、FCT：27日)、モニター調査のためのワークショップ(秋田：3月1日)実施。
3月	・各グループが送付した調査結果を英訳して、ロンドン事務局へ送付(3月16日締め切り)。 ・『fctGAZETTE』(No.85, 3月)で日本の取り組みを報告。	・3月10日までに、各グループは調査結果をサポートデスクに送付。
6月		・メディア・リテラシーの連続講座開催(6月に大阪、6～7月に岡山)。
7月	・『fctGAZETTE』(No.86, 7月)で日本の分析結果を報告、IAMCR年次大会「Media Panics: Freedom, Control and Democracy in the Age of Globalisation」(台北, 7月)、GMMPのセッションに日本からFCTが参加して発表。	・秋田でメディア・リテラシーワークショップ(7月1日)と講演会開催(2日)。
11月	・GMMPアジア会議「New Directions in Media Monitoring and Advocacy」(マニラ, 11月)にFCTが参加して日本の活動を報告。	
12月		・大阪・豊中でメディア・リテラシーワークショップを実施(12月)。
2006年 2月	・WACCがGMMPの報告書「Who Makes The News?»で世界のデータを発表(2月)。その一部を邦訳し、『fctGAZETTE』(No.88, 3月)で報告。	
11月	・GMMPアジア会議「Beyond Media Monitoring: Strategies for Gender Advocacy in Asia」(天津, 11月)にFCTが参加して日本の活動を報告。	・秋田で11月20日にメディア・リテラシーワークショップを実施。

びかけなど、主体的に参加し、ともにプロジェクトを形づくるためのネットワークである。日本から GMMP に数多くのモニターグループが参加したが、その前提条件として鈴木や FCT がグローバルなネットワークにアクセス可能だったことは非常に大きいと言える。

(2)国内ネットワークの構築

モニターグループの側からみると、GMMP のようなグローバルなイベントに参加するには、海外での取り組みや情報を日本国内に提供する機関が必要である。GMMP 実施に際しては FCT がその役割を担っている。

GMMP 実施に向けた日本国内の動きとしては、まず2004年6月に、アジア・太平洋地域フォーラム「世界がメディアを見つめる日：グローバル・メディア・モニタリング・プロジェクトとメディア・リテラシー」（立命館大学・京都。以下京都フォーラムとする）を開催している。このフォーラムでは、長年 WACC で働き、GMMP の運営において中心的役割を担ってきた Hermano が招かれ、GMMP をテーマに基調講演を行なっている。これは、メディア・リテラシーに関心をもつ日本の市民に対して GMMP の重要性を語るものであった。さらに2004年12月にも横浜で FCT フォーラムを開催し、GMMP への参加を検討している市民に対して説明会を実施している。

このような経緯からも、FCT が GMMP とモニターグループをつなぐ役割を担ったことは明らかであり、そうした背景があったからこそ、日本各地から11ものモニターグループの参加が可能になったと思われる。

(3)メディア分析の手法

ネットワーク構築の中心的存在であった FCT が、ただ単に GMMP の情報を提供しただけでなく、メディア分析の方法に精通していた点も重要である。FCT は、1980年からメディア分析調査を定期的実施しており¹¹⁾、GMMP 実施前からすでにメディア分析の手法を獲得していたと言える。

GMMP のモニター調査方法については、モニター日の4ヶ月前である2004年10月に WACC の事務局から送付されたモニター調査のガイドによって伝えられている。ガイドには、分析対象の選択から、新聞の収集やテレビ・ラジオニュース番組の録画・録音方法や分析方法、ジェンダーの視点とは何かという説明まで、詳細な調査方法が記述されている。しかし、そこにはジェンダーやメディア研究に関する専門的な用語もあり、メディア分析の未経験者にとっては難解なものであると言える。モニター調査方法の伝達に際して、GMMP-Japan 事務局は邦訳したガイドを送付するだけでなく、FCT（横浜）と立命館大学（京都）でのモニター調査をモニターグループに対して公開し、他のグループが分析方法について学べる場を設定した（表2、2005年2月）。その結果、大阪の4つのグループと大分のグループを代表するメンバーが参加している。つまり、GMMP への参加は、各モニターグループにとってはメディア分析の手法を学ぶプロセスでもあったと言える。

以上のように、日本からの GMMP への参加は、FCT を中心とする国際的なネットワークと日本国内のネットワークが基盤となっていることがわかる。ただし、このネットワークは情報提供を行なうためだけのものではない。GMMP 実施の意義を考えるフォーラムや、ジ

表3 GMMP2005のモニター調査に参加したモニターグループ

No.	グループ名	GMMP 参加の呼びかけ人・責任者	参加者	拠点となる場所
1	秋田・市民のメディア研究会（秋田）	FCT 会員	地元のテレビ局関係者やボランティア活動に携わる人など15名。	秋田市立教育委員会 女性学習センター
2	FCT（神奈川／東京）	GMMP コーディネーター	神奈川や東京在住の FCT メンバー 8 名	FCT 事務所
3	メディアカレッジ静岡（静岡）	FCT 会員・メディア・リテラシー講座の元受講生	ジェンダーの連続講座の元受講生など、19名（FCT 会員、女性学研究者、女性センターの職員も参加）	静岡女性センター アイセル21
4	立命館大学鈴木みどり研究室（京都）	GMMP コーディネーター	大学の学部生、院生16名	立命館大学
5	GMMP プレ講座受講生の会（大阪）	FCT 理事	メディア・リテラシー講座の元受講生と大阪府立の中学校の教員など、13名	大阪人権センター
6	とよなかメディア・リテラシー研究会（大阪）	FCT 会員	公務員、ボランティア活動に携わる人たち10名。	とよなか国際交流協会
7	MIKOFY（大阪）	メディア・リテラシー講座の元担当職員	女性センターの職員 9 名	とよなか男女共同参画推進センター
8	すてっぷ GMMP（大阪）	メディア・リテラシー講座の元受講生	メディア・リテラシー講座の元受講生 9 名	とよなか男女共同参画推進センター
9	エンパワメントいばらき（大阪）	メディア・リテラシー講座の元受講生17名	メディア・リテラシー講座の元受講生17名	茨木市立男女共生センターローズWAM
10	メディア・フォーラムおかやま（岡山）	FCT 会員	同フォーラムのメンバー 5 名と、モニター調査期間中に実施したメディア・リテラシー講座を企の受講生とともに参加。	岡山市男女共同参画社会推進センター、 岡山市立公民館
11	風ーおおいー（大分）	メディア・リテラシー講座の担当職員	メディア・リテラシー講座の元受講生17名	大分県男女共同参画プラザ

エンダーの視点によるメディア分析の方法を伝える場の設定によって、積極的に参加してメディア分析を学ぶという各モニターグループの能動的な行動を促進するものである。

2. GMMP からメディア・リテラシー活動へ

つぎに、FCT 以外の他のモニターグループによる取り組みをみることで、具体的にメディア・リテラシー活動が展開されるに至るまでのプロセスを明らかにする。FCT を中心に、日本

から GMMP に参加した11のモニターグループの概要は、表3のとおりである。

(1)地域に広がるメディア・リテラシーの学び

表3の「GMMP 参加の呼びかけ人・グループの責任者」の欄をみると、FCT の会員やメディア・リテラシー講座の元受講生や担当職員が多い。

FCT は、日常的に講師派遣や講座の企画・運営をするなどして、メディア・リテラシー活動

を展開しており、モニターグループが誕生した秋田、神奈川／東京、静岡、京都、大阪、岡山、大分のすべての地域で GMMP 実施以前に FCT の関わる講座を実施している¹²⁾。これらの講座を通してメディア・リテラシーを学んだ人びとが中心になってモニターグループをつくり、GMMP に参加している¹³⁾。

インタビュー調査によると、静岡のグループ (No. 3) の場合、講座終了の打ち上げの席で GMMP への参加が提案され、その場で参加が決定し、すぐにグループのメーリングリストを立ち上げたという。

通常、行政が主催するような講座は、たとえ連続講座であっても、予定された回数を超えて講座が実施されることはない。しかし、静岡や大阪、大分では、行政主催の連続講座が終了した後に、メディア・リテラシーを学び続けたいと望む受講生たちによってグループがつくられており、それが GMMP の参加へとつながっている (表3の No. 3, 5, 8, 9, 11)。

また、各モニターグループは、GMMP のモニター調査の作業中や終了後に、調査を通して気づいたことや考えたことを話し合う場をもっていたという¹⁴⁾。それは、メディアによるニュースの報道の仕方や登場人物のジェンダーによる取り上げられ方の違いに関してなどである。このようなプロセスについて、静岡のグループの責任者は、次のように述べている¹⁵⁾。

異なる認識や意識をもつ人たちが集まったことで、さまざまな視点から分析することができた。異なる立場の人と出会えたことが大きい (メディアアカレッジ静岡の責任者 K へのインタビュー、2005.3.10)。

このようにモニター調査では、GMMP の調査方法を示すガイドにある、ジェンダーの視点からの数量調査だけを実施したのではなく、異なる立場の人たちによる多様な視点での分析も行なわれていたことがわかる。

GMMP の調査方法を示すガイドには、分析方法については詳細な記述があるものの、参加者の学びや話し合いのプロセスなどについては何も言及されていない。「分析の判断に迷った際はメンバー同士で話し合う」というアドバイスが記されている程度である。すでに述べたとおり、メディア・リテラシーでは個人による分析の後、グループでの対話による討論と対話を行なう。このような学びの方法は、GMMP から得たものというよりは、GMMP 実施以前に行なわれた FCT によるメディア・リテラシー講座で学んだものであり、元受講生たちが、その分析方法を GMMP でも実践していることになる。このような活動をみると日本では、メディア・リテラシーを学んだ元受講生や FCT 会員たちが、その学びを続けたいという思いでグループを形成し、メディア・リテラシー活動の一環として GMMP を位置づけ、参加していたことがわかる。したがって、GMMP 実施以前からメディア・リテラシー活動の積み重ねがあったからこそ、GMMP の学びもより豊かなものになったと言えるだろう。

(2)活動の拠点

また表3にあるとおり、事務所をもつ FCT 以外はどのグループも公の施設を利用して調査を行なっている。施設の職員のみで結成されたグループ (No. 7) もあるが、上述したように、行政主催のメディア・リテラシー講座の元受講生で形成されたグループが多い。静岡のグルー

ブ（No. 3）には、施設の職員が一人加わり、「グループの活動をサポートしてくれた」という¹⁶⁾。行政主催の講座では、あらかじめ設定されたテーマや流れに沿って、講師やファシリテーターの主導のもとで学ぶことになる。しかし、GMMPのモニター調査では、参加者が自ら分析対象や活動の場所、時間などを決定し、分析対象の選択や収集などの準備にも携わる。したがって、GMMP実施に際しては、活動の主体はあくまでも参加者であるが、それ以前に行政が主催した講座からグループが生まれたことにより、活動の拠点が得やすかったということも大きいと言える。

本節では、GMMP実施に至るまでのFCTを中心とするモニターグループの取り組みに注目してきた。その結果、FCTが、国際的な取り組みと国内のモニターグループをつなげるハブとしての役割を果たしたことで、日本各地から11ものモニターグループの参加につながったことが明らかになった。またそのようなネットワークは、情報提供を行なうだけの一方的な流れのものではない。モニターグループも自ら情報を得るためにフォーラムへ参加し、メディア分析を学ぶなど、能動的な行動をつくりだすものである。こうした主体的な学びを生み出す関係がFCTを中心に構築されたとと言えるだろう。

次節からは、モニターグループに参加するオーディアンズが、GMMPからメディア・リテラシー活動への流れのなかでどのように関わったのかを具体的に明らかにするために、一つのケースとして秋田・市民の研究会（以下、メディア研）を取り上げ分析する。

IV. オーディアンズによるメディア・リテラシーの学び

1. 秋田・市民のメディア研究会の立ち上げ

メディア研は、地元民放テレビ局の出身者であるYが代表を務め、同テレビ局の社員や元記者などのメディア関係者、地域でボランティア活動に従事する人びとなど11名（女性5名、男性6名）と、メディア教育に関心をもつ地元の大学教員などの賛助会員4名（全員男性）が参加して始まった会である¹⁷⁾。

筆者は、メディア研の立ち上げから2006年11月までに計3回秋田を訪問した。その際、メディア研の活動の経緯を知るために、立ち上げに深く関与してきた会員3名へインタビュー調査を実施した。また、メディア研への参加の動機や学んだ内容を明らかにするために、2006年11月20日の例会に出席していた会員6名へのアンケート調査を行なった。

ここでは、筆者によるインタビュー調査やアンケート調査、メディア研が発行する会報などの資料をもとに作成した表4を示しながら、メディア研の成り立ちと活動をふり返り、参加するオーディアンズの能動性について明らかにしていく。

メディア研を立ち上げた中心メンバーは、代表であるY（男性、60代）、女性学習センターで情報活用ボランティアを務めるT（女性、50代）とS（女性、50代）の3名である¹⁸⁾。表4にあるとおり、この3名の出会いは、2004年12月に秋田市立女性学習センター主催による「街かどウォッチング講座」でYが講師を務め、その受講生としてTとSが参加したことに遡る。この講座は、『Study Guide メディア・リテラシー

表4 GMMP モニター調査実施までの秋田・市民のメディア研究会の活動の流れ

日 程	活 動 内 容
2004年1月-3月	・秋田市立女性学習センターで、ジェンダーをテーマに街中の広告を分析する「街角ウォッチング講座」開催（現、メディア研代表Yが講師）
6月25-27日	・アジア・太平洋地域フォーラム「世界がメディアを見つめる日：アクティブ・オーディエンスとメディア・リテラシー」（京都）にYが招待され参加。GMMPの情報を得る。
12月5日	・FCTフォーラム（横浜）にYが参加。GMMPのモニター調査の方法やプロセスなど、具体的な参加の仕方について情報を得る。
12月21日	・上述の街角ウォッチング講座の講師を務めたY、受講生で、秋田市立女性学習センターの情報活用ボランティアでもあるS、Tの計3名を幹事として、メディア研設立準備会を立ち上げる。
2005年1月27日	・「秋田・市民のメディア研究会」設立総会
2月2日	・GMMP参加準備
2月16日	・GMMPモニター日：テレビのニュース番組を録画、新聞7紙の収集
2月21日	・2月例会：GMMPモニター調査の作業を準備
3月1日	・「秋田・市民のメディア研究会」設立記念セミナー：GMMPのモニター調査を実施。筆者がファシリテーターとして参加。終了後、懇親会を開催。
3月14日	・3月例会：GMMPのデータを集約→日本のコーディネーターのもとへ郵送。

『ジェンダー編』（鈴木，2003）を用いて、ジェンダーの視点から街中の広告を分析するものである。講座終了後、さらに学びを続けたいと望む受講生とともにメディアについての勉強会を始めようとしていたところ、GMMP実施を知り、このプロジェクトへの参加を契機にメディア研を立ち上げることになったという¹⁹⁾。

メディア研の立ち上げを提案したYは、テレビ局に勤めていた時代から、『放送レポート』（メディア総合研究所）や書籍などを通じてメディア・リテラシーに関する情報を得て関心を持ち、メディアの制作側にこそメディア・リテラシーが必要だと痛感していたという²⁰⁾。退職後には、より深くメディア・リテラシーについて学びたいと考え、2泊3日の合宿形式で行なわれるFCTのメディア・リテラシー研修セミナー（神奈川県立かながわ女性センター）に参加し、FCTにも入会している。こうしたFCTとの関わりから、2004年6月の京都フォーラムや同年12月のFCTフォーラムに出席し（表

4）、GMMP実施を知ったそうである。ただし、グループとしての行動を起こすには、個人の熱意と行動力だけでなく、FCTのようなメディア・リテラシーの研究や活動に関する情報を提供する組織が不可欠である。

インタビュー調査でYはメディア研の立ち上げを次のようにふり返っている。

市民のワークショップ、街角ウォッチング講座のおもしろさを何人かが共感してくれたことと、Tさん、Sさんのような、情報ボランティアの人たちが、もっともっと深く情報を勉強したいというのがあって。やっぱり、市民の結集と言ったほうがいいのかな。なんか、欲求不満みたいなのがあってね、メディアに対してね。それを分析したりする、学習したい時期とぴったり合ったと思うんだよね。（Yへのインタビュー、2006.11.19、秋田）

Yは、市民活動に携わった経験はなかった

が、街かどウォッチング講座でメディアについて学びたいという意思をもつTとSに出会ったことで、メディア研の立ち上げに弾みがついたと振り返る。したがって秋田の場合、行政主催の講座での学びが予定された回数で終わるのでなく、メディア・リテラシーに関心をもつ人の出会いの場となり、メディアについて学ぶための新たなグループの立ち上げへとつながっていることがわかる。また、GMMPが5年に1度の国際的なイベントで、めったに参加できない貴重な機会であるため、ぜひ参加したいという思いもあったという²¹⁾。

2. メディア・リテラシーの学びに必要な要素

メディア研の主な活動は、メディア・リテラシーを学ぶための例会を毎月1回程度開催することであり、その例会は、2005年2月の設立時から2006年12月現在まで継続されている。また当初は、例会の予定や報告などを「お知らせ」として、メールリストで連絡していたが、2006年6月より会報「こととい」²²⁾を作成して、会員や賛助会員、女性学習センターに配布しているという²³⁾。「お知らせ」は、代表のYによって発行されていたが、「こととい」に切り替わってからは、編集に携わる会員数名が月に一度の編集会議をもちながら発行を続けている。

メディア研が例会を通しての学びをどのように実施しているかをみるために、インタビュー調査の結果やメディア研の「お知らせ」、会報「こととい」などの資料から表5を作成した。

表5をみると、メディア・リテラシーを学ぶために、『てれびキッズ探偵団』、『スキヤニング・テレビジョン日本版』²⁴⁾などの映像資料を用いたワークショップ、地元テレビ局の見学な

ど、さまざまな試みを実践していることがわかる。ただし、メディア・リテラシーの学びには、ジェンダーや子どもなどマイノリティ市民の視座からのメディア分析や、基本概念に沿った体系的な学びが必要とされている（鈴木、2001）。しかし、ここでは、そのような体系的な学びを実践しているとは言いがたい。

代表Yも、インタビュー調査のなかで、教材不足やファシリテーターなどの人材不足を指摘している。メディア研の活動以外に、FCTの研修セミナーなどでメディア・リテラシーを学んだ経験をもつのは、Yのみである。Tも「メディア・リテラシーの基本的なことについて学びたい。本を読んだだけでは、分析の手法は身につかない」と答え、メディア・リテラシーの基礎を学びたいと希望している²⁵⁾。しかし、たった一人で会の学びを主導していくにはおのずと限界があるだろう。そうした限界を補うために、メディア研はFCTと協力して、2005年7月と2006年11月にGMMPの活動の一環として、メディア・リテラシーワークショップを開催している（表5）。このような例会の流れをみると、モニターグループの立ち上げだけではなく、地域でのメディア・リテラシーの学びを継続的にサポートしていくようなメディア・リテラシーのネットワークや多彩な教材も必要であることがわかる。

3. メディア研での学び

つぎに、メディア研の参加者へのアンケート調査、インタビュー調査からメディア研でどのような学びが行なわれているかを明らかにしていく。

表5 秋田・市民のメディア研究会の学び

日 程	例 会 の 内 容
2005年 4月18日	4月例会：『てれびキッズ探偵団』（民間放送連盟制作）を用いて、メディア・リテラシーの基本概念を学ぶ。
5月16日	5月例会：『松本サリン事件の冤罪』（高校生の制作したドキュメンタリー）をみて意見交換
6月2日	特別例会：『てれびキッズ探偵団』（民間放送連盟制作）を用いて、メディア・リテラシーの基本概念、および、誤報と人権侵害の背景、ニュースの原則について学ぶ（講師：元ニュース記者の会員K）
6月20日	6月例会：各自が選んだ「メディア観察メモ」の意見交換
7月1日	GMMP ワークショップ：GMMP モニター日のニュース番組を用いて、ジェンダーの視点から分析（ファシリテーター：筆者）
7月2日	秋田市女性学習センターとの共催で、メディア・スタディ記念講演「メディアの『受け手』から能動的な『読み手』へ」（講師：鈴木みどり）
7月18日	7月例会：1日のワークショップ、2日の講演会の評価と反省、今後の課題を話し合う。
8月22日	8月例会：戦後60年の8月15日のニュース番組をモニター調査
9月22日	9月例会：引き続き、前回の例会での調査を実施
10月17日	10月例会：8月15日の新聞各社の社説を読み、比較分析
11月21日	11月例会：メディア現場訪問、NHK 秋田放送局を見学
12月19日	12月例会：忘年会
2006年 1月16日	1月例会：雪害と報道を考える。
2月20日	2月例会：災害発生時の報道問題・L ネット教材を用いて学ぶ。
3月20日	3月例会：新聞切り抜き情報とその周辺（会員Tからの報告）
4月17日	4月定例総会
5月15日	5月例会：メディア・リテラシー教材『スキヤニング・テレビジョン日本版』を用いて、ワークショップ
6月19日	6月例会：メディア・リテラシー教材『スキヤニング・テレビジョン日本版』を用いて、ワークショップ
7月29日	「メディアとしてのe-ネット講座」（総務省、文部科学省、通信業界6団体主催、秋田・市民のメディア研究会共催）開催（公開講座）
	8月例会：8月15日のこととい
9月19日	9月例会：「なぜ変えるの？教育基本法」（PTA 活動に深くかかわる会員Yさんの報告と意見交換）女性学習センターでのメディア講座の講師担当
	10月例会：メディア・リテラシー教材『スキヤニング・テレビジョン日本版』を用いて、ワークショップ
11月20日	11月例会：GMMP 経過報告とメディア・リテラシーワークショップ（ファシリテーター：筆者）

(1)参加の動機

アンケート調査によると、メディア研に参加した動機は、メディア・リテラシーを学びたいという理由の他には、「メディア出身者であるが、メディアを別の角度から見たかった」、「子どもに対して、メディアとの接し方について何か助言できるような力量をもちたい」、「一方的に流れるメディアについて、自分の思っている

ことや考えていることなどを比較検討したいと
 時々思っている」、「ジェンダー学習のために活用できるメディア教材を得るため」などである。このような回答から、メディア研への参加の動機は人によってさまざまであることがわかる。また、それぞれの動機は、メディア出身者であるという職歴やメディアとジェンダーをテーマにボランティア活動を継続してきたことな

ど、個人の日常的な活動や過去の経験とも深く結びついている。

(2) 継続して参加する理由

継続的に参加している理由については、「メンバーの年齢が多様である。以前にはそのような経験がなかった」、「常に、何かしら新しい知見を得、体験ができ、刺激的」、「お互いの意見を十分に理解しようとするところに相互理解と信頼が培われていく」、「年齢に関係なく、会員の人生経験からでてくるさまざまな『ものの見方』が実におもしろい。話を聞くことが楽しい」とある。

このようにみると、メディア研に継続的に参加している大きな要因の一つとして、さまざまな年齢層の人が参加して多様な意見を述べ合うという、対話による学びの実践が挙げられる。会員の一人は、「今まで生きてきて、自分は正しい、だから自分の意見や言葉づかいを否定されたり、批判されたりすると非常に嫌な思いをしていましたが、当会に入会してから他人の意見や考えを素直に受け入れることができるようになった」と、会への参加によって自分と異なる他者の意見を聞く姿勢が身に付いた、と自身の変化を指摘している。また、30代の男性は「私のケータイに80歳のおじいちゃん²⁶⁾から電話がかかってきて『靖国問題』について会話をするなど、以前であれば考えられなかった」とふり返る。これらの回答から、日常生活や職場では出会わないような人びとと出会い、多様な意見を述べ合うことの楽しさを実感していることがわかる。また、そのような学びの楽しさが会への継続的な参加につながっていると言える。

(3) ジェンダーについての学び

ジェンダーのアプローチを重視しているGMMPの目的の一つは、GMMPへの参加を通して、参加者がジェンダーについての学びを深めることである。また、マイノリティ市民の立場を重視するメディア・リテラシーの活動でも、ジェンダーは重要なテーマの一つである。そこで、ここでは、メディア研によるジェンダーについての学びを明らかにするなかで、GMMPを起点とするメディア・リテラシー活動とオーディエンスの関わりについてみていく。

アンケート調査をみると、「メディアと政治とジェンダーの結びつきの深さを学んだ」、「自分のなかに、まだ女性に対する差別意識があることを深く思い知らされた」など、メディアにみられる伝統的なジェンダーの価値観を問題にしたり、自分のなかのジェンダーに対する考え方の変化を指摘したりする回答がある。個人によって着目点は異なるが、GMMP実施以前よりもジェンダーについて考えるようになったというものが多い。

会員のなかでも、ジェンダーに対して強い関心をもつのは、情報活用ボランティアとして活動を続けてきたTとSである。このボランティア活動は、女性学習センターの依頼を受けて、1997年から現在まで、朝日、読売、日経などの主要紙と地方紙の新聞を対象に、ジェンダーの視点で記事を読み、女性が積極的に取り上げられている記事や男女共生社会に寄与するような記事などを切り抜いて、冊子にするという活動である²⁷⁾。

彼女たちは、メディア研立ち上げの当初からジェンダーについて学ぶことを強く希望しており、このことはYも認識していたという²⁸⁾。一

方、Yはメディア出身者であり、これまでジェンダーについて学ぶ機会をほとんどもたなかった。そのようなYと果たして協働で活動できるのか、また、ジェンダーについての共通理解をもつことができるのかという点に対して、TとSは当初懐疑的であったという。Sはインタビュー調査のなかで、「(Yはジェンダーについて)ぜんぜんわかっていなかったんだよ。今だってどうかな」と、笑いながら答える。では、なぜ一緒にグループを立ち上げることにしたのかと問うと、次のように述べている。

私たちがジェンダーと言えば、(Yが)「ああ、ごもっとも」って感じて言うんだもん。「それは捨てられない、大事なことだ」って言うから。そう言っている以上はさ、やっぱり考えなくちゃいけないと思ったの、私は。そう言ってくれているんだから。で、Tさんと、「よし、Yさんのことをしつけし直さないといけないな」って(笑)。「育てあげるべ」とか(笑)。(Sへのインタビュー、2006.11.21、秋田)

情報活用ボランティアとして彼女たちは、自宅で新聞記事を読み、切り抜いた記事を持ちよって学習センターに集まる。集まれば、メンバー間でさまざまな意見を述べたり批判的に分析をしたりするが、完成した冊子を配布後、その冊子を目にした読者の反応などを知ることはできなかった。そこでメンバーの一人が提案して、月に1度、冊子を読む会を設定したが、なかなか人は集まらなかったそうである²⁹⁾。その背景には、ジェンダーをテーマに活動することの難しさがあるのではないかと、Sは指摘する。

男女共生じゃなくて、昔のウーマンリブとか、フェミニストとか、過激な方のイメージが残っているもんだから。「せっかく我が家は、不平等でも何でも円満にしているのに。男女平等を叫んでさ、家がうまくいかなくなるよりは…」と言われてしまう。「男女共生って言えば、男も家事をやらなくちゃいけないだろう？」って、行政の人も言うし。(Sへのインタビュー、2006.11.21、秋田)

実際に、ウーマンリブやフェミニストが過激かどうか、または過激な印象が残っているかどうかは別にして³⁰⁾、ここでは長年続けてきた活動がなかなか外部に広がっていかないことへのもどかしさが示されている。こうした経験からSは、メディア研に参加した理由の一つとして、ジェンダーをテーマに多くの人と話し合い、意見交換する場を望んでいたことを挙げる³¹⁾。

一方、代表であるYは、ジェンダーについて何を学んだかという問いかけに、「ジェンダーについて学習している会員が多いので常に触れているような気がするが、その具体的な問題、結果は解らない」と答えている。ジェンダーに関する認識についてほとんど変化がみられないような回答を示す一方で、「ジェンダーに対する他の人の考え方に敏感になってきました。元はあまり気にしていなかったが、会員の言葉に刺激されて(言葉だけが先行していた時もあつた)丁寧に考えるようになった」とも述べている³²⁾。メディア研の立ち上げから2年近く経ち、徐々にジェンダーの問題について考え始めるようになったという状態だろう。

GMMPの実施によって、会員のジェンダーに対する意識がある程度深まったとは言え、Y

の回答に示されているように、著しく大きな変化があったというわけでもないようである。このような状況に対して、ジェンダーを重視しているSは、過去の経験からジェンダーの重要性を直接的に強く訴えるよりも、「いつのまにか、ジェンダーってということに対して、理解を深めて底辺が広まればいいかな」と述べ、続けて次のように答えている。

全然自分と違う人の話は聞きたくないじゃなくて。違う話だから聞きたいというのはあるね。…中略…「みんなが同じ意見を言う会」というのが、私は嫌なのよ。それは、みんな同じ考えをもっているから一つの意見しか出てこないじゃなくて、言えない雰囲気というのが出てくるんですよ。私なんかも、結構、気が弱いところがあるから、なんか、これを言っちゃあ場に合わないなとか。たいそう立派な意見が出れば、これを言ったらなんか恥ずかしいとか、こんなくだらないこと言えないとかって。それで言えない人が出てきて、同じ意見一つに集約されるというのが、よく私たちぐらいの年の会合ではあるからね。それは怪しいんだよね。そんなわけじゃないですか。で、反対意見のない話し合いなんか、発展性はないと思うから。それで、メディア研は、それぞれのことを言い合える一つの場でもあるよね。この意見にまとめようとか、そういうのはないもん。(Sへのインタビュー、2006.11.21, 秋田)

また、同じように情報活用ボランティアを続けてきたTは、情報活用ボランティアの活動だけに携わっていたころよりも、むしろメディア研に参加するようになってから、メディアとジェンダーに対する理解が深まったと指摘する。

今まで私たちがやってきたのは、ジェンダーが中心だったので、たまたま新聞というメディアを使っているということだったんですけど。で、実際メディア研に入って、まるっきり重なっているものだと、メディアがジェンダーをつくりあげていることに加担している、重なったものであると、ここ1、2年で学びました。…中略…一見、ジェンダーの問題と関係ないんじゃないかと思える問題を分析しても、どこにでもジェンダーが出てきますね。で、もしかして、その問題を自分が見ていなかったかもしれないと気づくことがたくさんありました。(Tへのインタビュー、2006.11.20, 秋田)

このようにみると、メディア研の会員は、多様なオーディアンスの存在やさまざまな意見を述べ合うことの重要性について、職場やボランティア活動での個人によって異なる経験や反省、そこで学んだことと照らし合わせて理解していることがわかる。また、特定のテーマや価値観を押し付けないという姿勢が、多様な意見を述べ合うことにつながるとも考えられる。ジェンダーの学びに関して言えば、会員の間で著しい変化はみられないものの、重要なテーマであるという共通認識はみられる。また、ジェンダーに対してもともと強い関心を持っていた会員にとっては、メディア研の学びに参加して多様な視点からメディアを分析することが、ジェンダーとメディアの問題の奥深さへの気づきにつながっていると言える。このことから、多様な意見や視点による学びがメディア・リテラシー活動を通して実践されていることが確認できる。

V. 考察

本稿では、メディア・リテラシー活動に参加するオーディエンスをアクティブ・オーディエンスと位置づけたうえで、GMMPからメディア・リテラシーへと展開する一連の取り組みを手がかりに、オーディエンスの能動性を引き出すメディア・リテラシー活動とは何かを追究してきた。

まず、GMMP実施に至るまでのプロセスに注目し、日本から11ものモニターグループの参加を可能にした背景には、国際的な取り組みとモニターグループをつなげるハブとしてのFCTの役割が重要であったことを明らかにした。

村松によれば、「エンパワーメント・アプローチはトップダウン方式の限界をみきわめ、女性組織の継続的・組織的なボトムアップの運動の重要性を強調する」（村松、1995：14）という。FCTを中心とするネットワークは、情報を提供するためだけのものではなく、各モニターグループがフォーラムなどに積極的に参加してメディア分析の方法を学ぶなど、能動的な行動を促進し、自立的な学びを生み出すものである。したがって、ここでの分析から、オーディエンスのアクティブな姿勢をつくりだすには、それぞれのグループの能動性や主体的な学びを引き出すようなネットワークの構築が必要であると言える。このようなアクティブな活動を支えた要因の一つとして、各モニターグループがGMMPへの参加を単にモニター調査の実施として捉えるのではなく、メディア・リテラシー活動の一環として位置づけていたことも大きいと言える。

つぎに、秋田・市民のメディア研究会（メディア研）を事例の一つに取り上げ、モニターグループに参加するオーディエンスの参加の仕方や活動を続ける動機に着目した。社会的背景や参加の動機は個人によって実にさまざまであるが、メディア研の会員は、それぞれ異なる職場やボランティア活動での経験と照らして、多様な意見を述べ合うことの重要性を理解している。そして、そのような多様な視点を反映した対話による学びの楽しさが、継続的なメディア・リテラシーの学びの原動力となっている。また、多様な視点からの分析は、ジェンダーとメディアの問題の奥深さへの気づきにつながっていることも確認できる。

鈴木によれば、メディア・リテラシーの学びには、①グループ活動、②能動的な参加、③対話、④ファシリテーターが必要であるという（鈴木、2001：104-105）。本稿での分析から、オーディエンスの能動的な参加は、社会的背景や職業など立場の違いを超えたグループ活動での対話による学びの楽しさによって支えられていると言える。つまり、能動的な参加は、グループ活動や対話、ファシリテーターの役割と密接に関わるものであり、アクティブ・オーディエンスの能動性を促進するようなメディア・リテラシーの学びを実践するには、これらすべての要素を考慮に入れる必要がある。ファシリテーターというメディア・リテラシーの学びを活性化させる役割に着目すれば、そうした人材の育成や教材開発などが課題として挙げられる。メディア研の場合、ファシリテーターや教材不足を補う意味で、FCTによるメディア・リテラシーワークショップが数回実施されてきた。こうした外からの刺激によって、メディア研の学びも活発に展開されてきた側面がある。グルー

ブによる学びを閉ざされたものにするのではなく、GMMPへの参加やFCTとの交流など、外からの刺激によって、グループ内の学びもさらに活性化される。GMMPの実施に際しては、FCTを中心にモニターグループによる能動的な学びを立ち上げるためのネットワークが構築されてきたが、今後は、刺激を与える環境および日常的な学びをサポートするような環境づくりも必要であると言えるだろう。

最後に今後の課題として、本稿では扱うことができなかったが、オーディアンスの能動性を社会的文脈でより深く分析する必要があると考えられる。市民に公開されているメディア組織に関する資料などのリソース、女性行政やメディア政策、メディアのもつ倫理規準など、政治・社会・経済・文化的状況は、オーディアンスの能動性やメディア・リテラシー活動のあり方も大いに関係している。こうした側面を考慮に入れ、メディア・リテラシー活動におけるアクティブ・オーディアンスの能動性をより深く追究することが今後の研究課題である。

注

- 1) たとえば、コマーシャルの中の男女役割を問い直す会の活動。
- 2) メディア・テキストに対するオーディアンスの能動性を追究するものとして、GMMPに参加したオーディアンスによるメディア分析を取り上げ、読みの多様性と能動性を示す研究をすでに行なっている（登丸・鈴木，2005）。
- 3) GMMPへの参加は、1回目に世界73カ国、2000年の2回目には70カ国、そして2005年の3回目には102カ国にまで及んでいる。それぞれのGMMPの結果は、報告書にまとめられている（MediaWatch, 1995, Erin Research, 2000, Gallagher, 2005）。事務局としてGMMPの運営に責任をもつのは、カナダのトロントを拠点に活動する国際NGO、World Association for Christian Communication（WACC）の女性プログラム担当スタッフである。WACCについては、<http://www.wacc.org>を参照。なお、GMMP 2005実施時は、イギリスのロンドンに事務所を置いていた。
- 4) たとえば、the Israel Women's Networkは1992年に放送局のもつ番組基準にジェンダーの視点に組み込むためのロビー活動を展開している。また、クロアチアのB.a.B.e.（Be Active, Be Emancipated）は、ジャーナリストに向けてのメディア・リテラシーセミナーを実施している。
- 5) GMMP 2005の報告書，“Who makes the news? Global Media Monitoring Project 2005”に掲載されている参加国一覧を参照。また，“New Directions in Media Monitoring and Advocacy”（マニラ，2005年11月），“Beyond Media Monitoring: Strategies for Gender Advocacy in Asia”（天津，2006年11月）では、GMMPを実施したアジア諸国のモニターグループの代表が集い、自国の参加状況を報告。
- 6) メディア・リテラシーをテーマに活動するNPOであり、創設は1977年で横浜に事務所を置いている。なお、GMMP実施時の代表理事は鈴木みどりであった。
- 7) 筆者は、京都の立命館大学鈴木みどり研究室でサポートデスクを担当し、GMMPの準備からメディア・リテラシーワークショップ実施に至るまで、積極的に関わってきた。
- 8) モニターグループの概要や参加の仕方は、FCTの機関誌『fctGAZETTE』でも報告されている（鈴木，2005，登丸，2005）。
- 9) 秋田・市民のメディア研究会の会員は「メディア研」と省略して呼んでいた。後述のインタビュー調査でも会員の発言としてこの用語が頻繁に使われる。ここでは、混乱を避けるために同じ形で省略して用いる。
- 10) 筆者は、GMMPのモニター調査やメディア・リテラシーワークショップのファシリテーターとしてメディア研の活動に参加してきた。また、ファシリテーターとは、メディア・リテラ

- シーの学びを活性化させる人。メディア・リテラシーの授業やワークショップなどの運営に責任をもつ。
- 11) FCTは、1980年からテレビ診断分析調査活動などのメディア分析調査を行ない、その研究成果を報告書として発表している。
 - 12) FCTのホームページ、<http://www.mlpj.org>を参照。
 - 13) モニターグループによる質問紙への回答と筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 14) 筆者が行なった電話でのインタビュー調査による。
 - 15) 筆者が行なった電話でのインタビュー調査による。
 - 16) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 17) これは2005年2月GMMP参加時の状況。その後、一定期間活動から離れる会員や新規の会員がいるなど、会の人数は流動的である。
 - 18) TとSは、その他、人権や国際交流、ジェンダーに関わるさまざまなボランティア活動に従事している。
 - 19) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 20) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 21) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 22) 会報「こととい」はA4サイズの用紙に両面刷りしたもの。会の活動やお知らせを掲載している。
 - 23) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 24) 無藤隆監修『てれびキッズ探偵団』社団法人日本民間放送連盟、2000
鈴木みどり監修『スキヤニング・テレビジョン日本版』イメージサイエンス、2003
 - 25) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 26) メディア研の会員の一人。
 - 27) 筆者が行なったインタビュー調査による。なお、1997年から現在の間に、メンバーや対象とする新聞には多少の変化があるという。
 - 28) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 29) 筆者が行なったインタビュー調査による。
 - 30) 現在ジェンダーをめぐるさまざまな議論が展開されており、ウーマンリブやフェミニストなども重要なキーワードであると言える。しかし

本稿では、オーディエンスの能動性を引き出すメディア・リテラシー活動に焦点をあてるため、これらについては論じない。

- 31) 筆者が行なったインタビュー調査による。
- 32) 筆者が行なったアンケート調査による。

文献

- Ang, I. (1985) *Watching Dallas*. London: Methuen.
- 阿部潔 (2001) 「シドニー・オリンピック『南北合同行進』の伝えられ方／視られ方—グループ・ディスカッションから見えてくるもの」鈴木みどり編『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社：140-157.
- Buckingham, D. (1993) *Reading Audiences*, Manchester University Press, Manchester.
- Erin Research (2000), *Who makes the news? The Global Media Monitoring Project 2000*, London: WACC.
- Gallagher, M. (2001) *Gender Setting*, WACC, London.
- Gallagher, M. (2005) *Who makes the news? Global Media Monitoring Project 2005*, WACC, London.
- Hermano, T. (2004) "Why GMMP? Gender, Media and Empowerment" Briefing Paper for the Asia-Pacific Forum on Active Audiences, organized by Ritsumeikan Media Literacy Project (RitsMLP) / Forum for Citizens' Television and Media (FCT) / the Asian Network of Women in Communication (ANWIC), Ritsumeikan University, Kyoto, 2004.6.25-27.
- MediaWatch (1995) *Global Media Monitoring Project: Women's Participation in the News*, Toronto.
- 村松安子 (1995) 「エンパワーメントに向けて」村松安子・村松泰子編『エンパワーメントの女性学』有斐閣：1-20.
- Radway, J. A. (1987). *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*, University of North Carolina Press, Chapel Hill.
- 鈴木みどり (1997) 「メディア・リテラシーとは何か」同編『メディア・リテラシーを学ぶ人のた

- めに』世界思想社：2-22.
- 鈴木みどり（2001）「ジャーナリズムとメディア・リテラシー」同編『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社：100-117.
- 鈴木みどり（2003）『Study Guide メディア・リテラシー [ジェンダー編]』リベルタ出版。
- 鈴木みどり（2004）「GMMPとメディア・リテラシー」アジア・太平洋地域フォーラム「世界がメディアを見つめる日」発表資料，立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクト（RitsMLP），FCT 市民のメディア・フォーラム（FCT），the Asian Network of Women in Communication（ANWIC）主催，立命館大学，京都，2004.6.25-27.
- 鈴木みどり（2005a）「メディア・リテラシーとジェンダー」北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”編『ジェンダー白書3—女性とメディア』：62-83.
- 鈴木みどり（2005b）「世界モニター日を迎えて」『fctGAZETTE』No.85，FCT：2-5.
- 鈴木みどり（2005c）「ジェンダーとメディア」竹内郁郎他編『マス・コミュニケーション研究Ⅱ』北樹出版：275-294.
- 登丸あすか（2005）「GMMPからメディア・リテラシーワークショップへ」『fctGAZETTE』No.8，FCT：2-19.
- 登丸あすか・鈴木みどり（2005）「ジェンダー・アプローチによるTVニュース分析とメディア・リテラシー—2005年グローバル・メディア・モニタリング・プロジェクト（GMMP）の取り組みから」『立命館産業社会論集』第41巻第3号：3-30.
- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会編（1991）『メディアに描かれる女性像—新聞をめぐって』桂書房。
- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会編（1993）『メディアに描かれる女性像—新聞をめぐって 増補反響編付』桂書房。
- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会編（1996）『きっと変えられる性差別語—私たちのガイドライン』三省堂。

Active Audiences and Media Literacy: The GMMP as a Motivating Factor in Media Literacy Activities in Japan.

TOMARU Asuka *

Abstract: In traditional media research, the study of representation, what is reconstructed and represented by media, has been the main focus. Recently, the presence of the audience, who receive and interpret information from media, has been emphasized. Moreover, what is required in media literacy to bring out the activeness of the audience is becoming an issue. This paper is based on an analysis of the Global Media Monitoring Project, the GMMP, and media literacy activities. It explores the conditions for bringing out the activeness of the audience in media literacy. Firstly, the process by which the eleven Japanese monitoring groups who participated in the GMMP carried out their activities is analysed. From the analysis it can be seen that the creation of a network helps to facilitate monitoring group activities, and produces active participation and independent study. Secondly, one of the Japanese GMMP monitoring groups, the Akita Citizens' Media Forum, is presented as a case study to show the factors contributing to the continuation of media literacy activities by monitoring groups. This paper focuses on the way members participate in this monitoring group and their motivations. Based on the findings of this research, it argues that dialogue which includes a variety of perspectives is an important condition for bringing out the activeness of the audience.

Keywords: media literacy, active audiences, empowerment, gender, Global Media Monitoring Project (GMMP), networking.

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University